

[Report]

A longitudinal study about home nursing

— The learning effects of practical training in home-visit nursing —

Yumi Kono*, Hisako Tsumura*, Noriko Ueno*, Keiko Fujimoto and Yuki Hirata*

* Department of Nursing, Faculty of Nursing and Rehabilitation, Aino University

Abstract

In this study we compared the images of home-visit nursing entertained by sophomores, who had not received education on home nursing yet, with those entertained by juniors, who had already received such education. Also, through a longitudinal questionnaire survey conducted before and after the experience of practical training in home-visit nursing, the shift in the aspects of learning was examined as well as the degree of satisfaction with the practice and the factors that influenced learning. The result suggests that students have little knowledge and vague images about home-visit nursing before attending home-visit nursing courses (I) and (II), but after attendance they gain concrete images, which are intensified in proportion to their training experience. It is clear that “interest” and “the frequency of visits” influence learning in practical training, and that an average of 3 visits per day is necessary for effective learning. On the other hand, the contents of learning are varied, depending upon the training facilities where students study.

Key words : home nursing, home-visit nursing, practical training, nursing student, longitudinal study

在宅看護に関する縦断的研究

——訪問看護実習の学習効果——

河野由美*, 津村寿子*, 上野範子*
藤本佳子*, 平田由紀*

【要旨】 本研究は、訪問看護師の仕事に関するイメージをどの程度有しているかに関して在宅看護論受講前の2年生と受講後の3年生で比較した。あわせて、学生の学びの変化を、訪問看護に関する実習前後の縦断的アンケート調査から検討するとともに、実習での学生の満足度や学びに影響する要因を検討した。結果から、在宅看護論Ⅰ・Ⅱ受講前の2年生では訪問看護師の仕事に関する具体的なイメージは有していないが、受講後の3年生では具体的なイメージが高まり、実習を経験することでより強まることが明らかとなった。

そして、実習での学びの程度に影響するのは「訪問看護に対する興味を高めること」と「訪問件数」であることが明らかとなり、学生の学びには平均して概ね3件/日ほどの訪問件数が必要であることが明らかとなった。一方、実習施設により、学生の学びの内容は異なり、どのような施設で実習するかが、学生の学びに影響することが明らかとなった。

キーワード：在宅看護、訪問看護、実習、看護学生、縦断的研究

1. はじめに

在宅看護論は1997年に看護師課程の中に新カリキュラムとして組み入れられた、非常に新しい看護領域である。

藍野大学医療保健学部看護学科では在宅看護は地域看護学の中に位置付けられており、在宅看護論として、2年次の後期に在宅看護論Ⅰが3年次の前期に在宅看護論Ⅱが開講されている。その他にも在宅看護と関連する地域看護学の講義としては地域看護学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと地域看護の課題と探求が3年次の後期から4年次にかけて開講されている。

一方、地域看護学に関する実習として3年次後期から4年次前期に担当されている地域看護学実習Ⅰと4

年次後期に担当されている地域看護学実習Ⅱがある。地域看護学実習Ⅱでは「公衆衛生看護活動の実際を具体的に、総合的に理解し、地域における看護の展開に必要な知識と技術を学ぶ」ことを目的とし、保健所や保健センターでの実習を行っている。地域看護学実習Ⅰで学生は、「地域の中で療養する人々やその家族の生活実態、健康上の問題を理解し、在宅における看護の機能と役割の実際について学ぶ」ことを実習目的とし、以下の4つの実習目標を定めている。

- 1) 訪問看護ステーションの機能と活動の概要を理解できる。
- 2) 在宅療養者とその家族を生活者としてとらえ、抱える問題を解決するための援助方法を理解できる。

* 藍野大学医療保健学部看護学科

3) 訪問看護の役割と方法を理解できる。

4) 地域の社会資源の存在と活用方法、および関連する職種との連携の実際を理解できる。

この実習目的・目標を達成するために、1～3名の学生が訪問看護を提供する施設1箇所で開催2週間の実習を行っている。2週間の実習のうち初日と最終日そして、水曜日を帰校日とし、学内で演習を含めた実習を行っているため、学生が現地の施設に行くのは実質的には6日間である。実習施設として9箇所の訪問看護ステーションと1箇所の居宅療養部、合計10箇所（以後、訪問看護提供施設と称す）の協力を得ている。各実習施設にはそれぞれ特徴があり、精神疾患のある人への訪問に力を入れている訪問看護提供施設や、在宅ターミナルケアに力を入れている訪問看護提供施設等、訪問看護提供施設によって特殊性がある。また、各訪問看護提供施設の規模も様々で看護師の職員数は3～15名と幅広い。地域看護学実習Ⅰでは学生の学習意欲を高めるために、実習に先立ち学生に「今回の地域看護学実習Ⅰで学びたいこと」を記させて提出させ、施設の特徴や特殊性の情報を開示し、どのような施設で学びたいか学生の希望を調整して、実習する施設を決定している。

本校では、2008年に完成年度を迎え、春には大学としてはじめての卒業生を送り出すことになる。今回、1期生への縦断的調査から在宅看護関連の講義・実習についての学生の現状と問題点や改善点を明らかにし、今後より良い教育内容を構築するための基礎資料を得たのでここに報告する。

2. 研究目的

地域看護学では医療モデルに基づいた疾病に関する知識だけでなく、生活者としての対象を理解し、生活を支えるといった生活モデルでの視点等、幅広い知識と対象理解・支援能力が必要となる。しかし、3世代世帯が減少している現代においては、在宅看護論を学ぶ前では、多くの学生が在宅看護や訪問看護に接する経験は少なく、これらに対する知識も乏しいと思われる。そうした状況にあって本研究では、学生が訪問看護師の活動に関してどの程度理解しているのかの現状を明らかにし、在宅看護論の講義や地域看護学実習Ⅰを受けることでどのように変化するのか、学習効果を検討する。あわせて、学生が生活者としての対象の理解を深め、より学習効果を上げるためには如何なる実習構築が必要かを検討することを目的とする。

3. 研究方法

1) 対象と方法

調査1：在宅看護論Ⅰ・Ⅱを学ぶ前の2年生と学んだ後の3年生の、訪問看護師や病棟看護師の仕事に関する具体的なイメージの違いを検討するため、2年生86名と3年生85名に講義時間内に集合調査を実施した。

調査2：地域看護学実習Ⅰを経験することで、どのように学生が変化するのかを解明するため、実習前と地域看護学実習Ⅰ終了後の79名の学生に縦断的アンケート調査を実施した。なお、縦断的アンケート調査実施において、各被験者を識別するため、シリアル番号として生年月日と血液型を用いた。

2) 調査時期

調査1

2年生：在宅看護論Ⅰ初回講義時の2006（平成18）年10月20日に集合調査を実施した。

3年生：地域看護学実習開始前（在宅看護論Ⅰ・Ⅱ、地域看護学Ⅰ・Ⅱ終了時の2006（平成18）年7月19日に集合調査を実施した。

調査2

調査1の3年生に対して、各自地域看護学実習Ⅰが終了した実習最終日にアンケート調査を実施した（実習期間2006年10月～2007年5月）。

3) 倫理的配慮

集合調査のアンケート用紙には「本アンケートは、より良い授業構築のための資料とすることを目的としています。アンケートは無記名で個人を特定することは致しません。従って、成績に影響することは全くありません。」の一文を記載した。調査は強制ではなく、回答したくない者はアンケートを拒否できること、生年月日や血液型は今後の調査において同じ記載をすれば虚偽の生年月日でも良い旨、口頭で伝えた。アンケートに回答したことをもって調査協力への承諾が得られたものとした。

4. 結果

1) 調査1：2年生と3年生の比較

(1) 病棟看護師と訪問看護師の仕事に関するイメージ

病棟看護師や訪問看護師の仕事に関するイメージを

表1 2年生と3年生の、訪問看護師の仕事イメージについての平均値の差の検定

| 質 問 | 学年 | N | Mean | SD | 有意確率 |
|--------------------------------------|----|----|------|------|---------|
| ① 訪問看護師はどのような仕事をするのか具体的なイメージがありますか？ | 2 | 81 | 2.54 | 0.67 | p< .001 |
| | 3 | 80 | 3.04 | 0.65 | |
| ② 病棟の看護師はどのような仕事をするのか具体的なイメージがありますか？ | 2 | 81 | 3.26 | 0.59 | p< .05 |
| | 3 | 82 | 3.44 | 0.57 | |

どの程度有しているのかを検討するために、「病棟の看護師はどのような仕事をするのか具体的なイメージがありますか」と「訪問看護師はどのような仕事をするのか具体的なイメージがありますか」に対して、非常にある（4点）～全くない（1点）までの4件法で回答を求めた。4件法のため中位点（あるとも、ないともどちらでもない点）は2.5点となる。また、2年生と3年生の回答の違いを統計的に検証するのに、学年を独立変数とし、イメージを有する程度を従属変数としてT検定を実施し、結果を表1に示した。

3年生は2年生よりも「訪問看護師」「病棟看護師」の仕事に関して具体的なイメージを有していることが明らかとなった。「病棟看護師」においては、2年生も3年生も平均値は中位点の2.5を大きく超え、病棟看護師の仕事に関する具体的なイメージを有していた。しかし、「訪問看護師」に関しては、3年生の平均値は3.0点を超え、訪問看護師の仕事に関する具体的なイメージをどちらかと言えば有しているが、2年生の平均値は2.5点と中位点にあり、訪問看護師の仕事に関する具体的なイメージを有しているともいないともどちらとも言えないことが明らかとなった。この2年生は3年生よりも訪問看護師の仕事に関して具体的なイメージを有していないとの結果は、2年生が在宅看護論Ⅰ・Ⅱの講義をまだ受講していないことが影響していると思われる。そして、3年生においても、平均値は3.0点と、どちらかと言えば有している程度であり、訪問看護師の仕事を理解する上で、現行の在宅看護論の講義だけでは十分でないことが示された。

2) 調査2：地域看護学実習Ⅰ終了時の調査

(1) 実習施設ごとの学びの違い

地域看護学実習Ⅰの実習目的・目標に関連させて、学生の学びの内容に関することを検討するために、「①訪問看護への興味を高めることができたか」「②訪問看護師の役割について理解を深めることができましたか」「③在宅看護において家族を支える重要性を理解することができましたか」「④在宅看護における生活の場の重要性を理解することができましたか」等の質問を実施した。また、地域看護学実習Ⅰでの「療

養者宅への全訪問件数」（訪問に同伴した全件数）、「受持ち療養者宅への訪問回数」を求めた（表2参照）。設問①～⑤に関する回答は、「非常にできた（学びになった）」（4点）～「全くできなかった（学びにならなかった）」（1点）の4件法のリッカート方式で実施した。

実習施設によって学生の実習満足度や学びの内容の違いがあるかを検討するために、施設を独立変数とし、「⑥実習の満足度」他を従属変数とした分散分析を実施し、結果を表2に示した。

「⑥実習の満足度」には施設による違いは認められなかった。従って、学生の実習満足度には施設による要因以外が関係していることが示された。なお、実習満足度は平均すると、82.3点と非常に高い満足度を得ていた。

しかし、「⑥実習の満足度」以外の質問項目では、施設による違いが認められた。学生の学びの内容・程度には、どのような施設で実習するかが影響することが伺えた。

設問①～⑤はリッカート方式の4件法で実施しているため、中位点は2.5点になるが、設問①～④ではどの施設においても中位点の2.5点を超えていることから、学生は今回の実習で「①訪問看護への興味を高める」「②訪問看護師の役割を理解する」「③在宅看護において家族を支える重要性を理解する」「④在宅看護における生活の場の重要性を理解する」ことができたかと捉えている。但し、そうした“でき”具合においては、施設によって“非常にできた”や“どちらかと言えばできた”といった程度の違いがある。「③在宅看護において家族を支える重要性を理解する」と「④在宅看護における生活の場の重要性を理解する」の平均値は、四点満点で3.8点と非常に高く、学生は地域看護学実習Ⅰで、在宅看護において家族を支える重要性や生活の場の重要性を理解できたことが示された。

療養者宅への全訪問件数（以後、訪問件数と略称する）では、施設ごとにはばらつきがあり、最も多い所で23.8件、最も少ないところでは8.0件であった。地域看護学実習Ⅰでは概ね施設に6日間出向くため、施設

表2 実習施設ごとの平均値

| | ①訪問看護への興味を高めることができましたか | | ②訪問看護師の役割について理解を深めることができましたか | | ③在宅看護において家族を支える重要性を理解することができましたか | | ④在宅看護における生活の場の重要性を理解することができましたか | | ⑤今回の実習はあなたの学びになりましたか | | ⑥実習の満足度は百点満点で何点になりますか | | 療養者宅への全訪問件数 | | 受持ち療養者宅への訪問回数 | |
|-----|----------------------------|------|------------------------------|------|----------------------------------|------|---------------------------------|------|-----------------------------|------|-------------------------|------|------------------------------|------|------------------------------|------|
| | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD |
| A施設 | 2.8 | 0.46 | 2.6 | 0.52 | 3.4 | 0.74 | 3.9 | 0.35 | 3.4 | 0.52 | 72.4 | 13.9 | 8.0 | 4.45 | 1.9 | 0.64 |
| B施設 | 3.2 | 0.93 | 3.5 | 0.52 | 3.8 | 0.44 | 3.8 | 0.44 | 3.8 | 0.38 | 82.7 | 13.2 | 18.1 | 3.19 | 3.3 | 1.11 |
| C施設 | 3.7 | 0.52 | 3.8 | 0.41 | 3.8 | 0.41 | 4.0 | 0.00 | 3.8 | 0.41 | 86.3 | 15.0 | 11.7 | 3.79 | 2.8 | 0.98 |
| D施設 | 3.5 | 0.55 | 3.5 | 0.55 | 3.8 | 0.41 | 3.7 | 0.52 | 4.0 | 0.00 | 83.0 | 11.1 | 18.0 | 2.40 | 3.2 | 0.75 |
| E施設 | 3.9 | 0.33 | 3.7 | 0.50 | 4.0 | 0.00 | 4.0 | 0.00 | 4.0 | 0.00 | 89.4 | 9.2 | 17.0 | 2.98 | 2.0 | 0.00 |
| F施設 | 2.9 | 0.69 | 3.4 | 0.53 | 4.0 | 0.00 | 3.6 | 0.53 | 3.1 | 0.38 | 74.5 | 11.1 | 11.3 | 2.10 | 2.1 | 0.38 |
| G施設 | 3.4 | 0.67 | 3.4 | 0.50 | 4.0 | 0.00 | 3.7 | 0.47 | 3.8 | 0.40 | 80.6 | 18.0 | 11.8 | 2.02 | 5.1 | 1.76 |
| H施設 | 3.5 | 0.58 | 3.0 | 0.82 | 3.0 | 1.41 | 3.0 | 0.82 | 3.8 | 0.50 | 78.8 | 8.5 | 12.0 | 3.52 | 2.5 | 0.58 |
| I施設 | 3.5 | 0.53 | 3.5 | 0.53 | 3.9 | 0.35 | 3.9 | 0.35 | 4.0 | 0.00 | 86.3 | 11.6 | 23.8 | 7.45 | 2.1 | 0.35 |
| J施設 | 3.8 | 0.46 | 3.8 | 0.46 | 3.9 | 0.35 | 3.6 | 0.52 | 4.0 | 0.00 | 86.1 | 8.2 | 14.6 | 1.60 | 2.0 | 0.00 |
| 合計 | 3.4 | 0.68 | 3.4 | 0.59 | 3.8 | 0.51 | 3.8 | 0.46 | 3.8 | 0.41 | 82.3 | 13.1 | 15.0 | 5.61 | 2.8 | 1.36 |
| | F[9/70]= 2.71, p<.01 | | F[9/70]= 3.44, p<.002 | | F[9/70]= 2.59, P<.02 | | F[9/70]= 2.27, p<.02 | | F[9/70]= 5.84, p<.001 | | F[9/69]= 1.38, Ns | | F[9/69]= 12.37, p<.001 | | F[9/70]= 11.43, p<.001 | |

注) 太字イタリック箇所は最低値を示している。下線入りの太字は最高値を示している。

表3 実習の学びと満足度を目的変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)

| 説明変数 | 目的変数 | 実習が学びになった程度 | 実習についての満足度 |
|-------------------------------|-----------------------|-------------|------------|
| | | β | β |
| 訪問看護に対する興味を高めることができましたか | | 0.40 *** | 0.36 *** |
| 訪問看護師の役割について理解を深めることができましたか | | | 0.24 * |
| 在宅看護において家族を支える重要性を理解することができたか | | | 0.23 * |
| 療養者宅への全訪問件数 | | 0.20 * | |
| | 調整済み R ² 乗 | 0.28 *** | 0.24 *** |

*p<.05 ***p<.001

注) 説明変数として、「在宅看護における生活の場の重要性を理解することができたか」「受持ち療養者宅への訪問回数」「A教員の影響(A教員を1とし、それ以外の教員を0とした)」「B教員の影響(B教員を1とし、それ以外の教員を0とした)」「C教員の影響(C教員を1とし、それ以外の教員を0とした)」を投入したが、どの目的変数にも有意な回帰を示さなかったため表からは削除している。

オリエンテーションや最終カンファレンスの時間を考慮すると、最も多い施設では日に4~5件訪問していることになり、最も訪問件数が少ない施設では日に1~2件の訪問となっていた。

最も訪問件数が少ないA施設では「①訪問看護への興味を高めることができましたか」「②今回の実習で訪問看護師の役割について理解を深めることができましたか」に関し、全施設中で理解を深めた程度が最も低い。やはり、訪問への同行件数は学生の訪問看護師の役割理解に影響するため、ある程度の訪問件数の確保が必要であると思われる。

(2) 学生の学びの程度と実習満足度に影響する要因
次に施設要因の他に、学生の学びの程度や実習満足度に影響する要因を明らかにするため、学生の「⑥実習満足度」と「⑤今回の実習はあなたの学びになりましたか」を、それぞれ目的変数とし、訪問件数他を

説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を実施し、結果を表3に示した。なお、地域看護学実習Iでは3名の教員がそれぞれ施設を担当し、学生への実習指導を行っている。担当教員によって学生の学びや実習満足度は異なるのではないかと予測されたため、A・B・Cの3名の担当教員をダミー変数としてそれぞれ投入した。

表3を見れば明らかのように、学生の「学びになった程度」や「実習満足度」には担当教員や受持ち利用者への訪問回数などは有意な回帰を示していない。従って、学生の学びの程度や実習満足度には教員による違いや受持ち訪問回数は直接的には大きな影響を与えないことが示された。学生が今回の実習が学びになったと思う程度に影響するのは「訪問看護に対する興味を高めること」と「訪問件数」であることが明らかとなり、訪問件数が多く、訪問看護に対する興味を

高められた学生ほど実習が学びになったと感じていることが明らかとなった。

一方、実習満足度に影響する要因は「訪問看護に対する興味を高めること」と「訪問看護師の役割について理解を深めることができた」そして、「在宅看護において家族を支える重要性を理解することができた」であった。利用者だけでなく、利用者の家族を支える重要性を理解し、訪問看護に対する理解を深め、興味が高められた学生ほど、実習に対する満足度は高くなっていた。

上記の結果から、「訪問看護に対する興味を高めることができた」程度は、学生の実習満足度や学びの程度に大きな影響を与えることが明らかとなったが、訪問看護に対する興味を高めるのに影響する要因は何だろうか。このことを検討するため、次は「訪問看護に対する興味を高めることができた」程度を目的変数とし、説明変数として「療養者宅への全訪問件数」「受持ち療養者宅への訪問回数」、A・B・Cの3名の担当教員のダミー変数をそれぞれ投入して、重回帰分析を実施した。また、本被験者には実習開始前にもアンケートを実施（調査1）し、「訪問看護師はどのような仕事をするのか具体的なイメージがありますか」をリッカート方式の4件法で回答を求めている。この質問は学生の実習前のレディネスと関連するため、この調査の回答も説明変数として投入した。

その結果、「訪問件数」や実習前の「訪問看護師の仕事に関する具体的なイメージを有する程度」は有意な回帰をしめさず、有意な回帰を示したのはA教員の影響であった（表4参照）。A教員は有意な正の回帰を示していることから、A教員が担当した学生は「訪問看護に対する興味を高めることが」「非常にできた」と回答することが明らかとなった。なお、先に示したように3名の教員は、それぞれ2～4施設を担当して学生の実習指導に当たっている。よって、担当教

表4 訪問看護に対する興味を高めることを目的変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）

| 説明変数 | 目的変数 | 今回の実習で訪問看護に対する興味を高めることができましたか |
|----------------------|---------|-------------------------------|
| | β | |
| A教員の影響 | 0.26 * | |
| 調整済みR ² 乗 | 0.05 * | |

注) * $p < .05$ *** $p < .001$

「療養者宅への全訪問件数」「受持ち療養者宅への訪問回数」「訪問看護師はどのような仕事をするのか具体的なイメージがありますか」「B教員の影響」「C教員の影響」は説明変数として投入したが、有意な回帰をしめさなかったため表からは削除している。

員の影響には施設による違いも含まれている。前述の表2の結果で示したように、「訪問看護に対する興味を高めることができた」程度には施設による違いが認められたが、学生が「訪問看護に対する興味を高めることができた」と認識できるようにするためには、施設や担当教員の影響が大きいために本調査結果から示された。従って、学生が実習前に訪問看護師の仕事に関する具体的なイメージをどの程度有しているかと言った、学生のレディネスよりも、指導教員の実習での関わりや施設が、訪問看護に対する興味を高めるのには重要であることが明らかとなった。また、学生の満足度には教員は直接的に影響するのではなく、学生の訪問看護への興味を高めることで、間接的に影響することが示された。

(3) 学生の学びを高める訪問件数

訪問件数は学生の学びの程度に影響していたが、学生は一体、どれくらいの訪問件数が適量と思っているのであろうか。訪問件数に関する学生の認識と、実際の訪問件数との関連を示したのが表5である。学生の認識により、実際の訪問件数は異なっている ($F[4/73] = 6.36, p < .001$)。表5を見ると明らかのように、「普通」と回答した者の実際訪問件数の平均は15.5で、学生はこの15.5件より訪問件数が少なくなるにつれて訪問件数が少ないと感じ、反対に15.5件より多くなるにつれて、訪問件数が多くなるといった直線的な関係にある。訪問件数が6件前後の場合には、非常に少ないと学生は感じている。訪問件数が19件以上の場合には、非常に多いと学生は感じている。

では、学生の学習効果に最も適した訪問件数はどの程度であろうか。この点を明らかにするために、「今回の実習はあなたの学びになりましたか」を独立変数とし、訪問件数を従属変数とした分散分析を実施し、結果を表6に示した。その結果、学生の学びの程度に

表5 訪問件数に関する学生の認識

| | 度数 | Mean | SD |
|-------------|----|------|------|
| 非常に少ない | 3 | 6.0 | 2.65 |
| どちらかと言えば少ない | 11 | 10.8 | 3.88 |
| 普通 | 45 | 15.5 | 5.49 |
| どちらかと言えば多い | 14 | 17.4 | 4.15 |
| 非常に多い | 5 | 19.4 | 4.81 |
| 合計 | 78 | 15.0 | 5.62 |

表6 学生の学びの程度と実際の訪問件数

| | 度数 | Mean | SD |
|----------------|----|------|------|
| どちらかと言えば学びになった | 16 | 12.0 | 4.38 |
| 非常に学びになった | 63 | 15.8 | 5.65 |
| 合計 | 79 | 15.0 | 5.61 |

表7 実習前後の訪問看護に関する認識の変化

| | Mean | N | SD | 繰返しのある T 検定 |
|-----------------------------------|------|----|-----|-----------------------------|
| 今回の実習で訪問看護師の役割について理解を深めることができましたか | 3.5 | 62 | .59 | t = 4.81, df = 61 p < .001 |
| 訪問看護師はどのような仕事をするのか具体的なイメージがありますか? | 2.9 | 62 | .62 | |
| 今回の実習で訪問看護に対する興味を高めることができましたか | 3.4 | 62 | .69 | t = 4.81, df = 3.8 p < .001 |
| 訪問看護師はどのような仕事をするのか具体的なイメージがありますか? | 2.9 | 62 | .62 | |

注) 調査1と2において、血液型や生年月日を記載しなかったものなど縦断的調査が実施できなかったものは分析から除外しているため、調査1の結果とは平均値が異なっている。

より訪問件数に有意な差が認められた。「非常に学びになった」と回答した者の訪問件数は15.8件、「どちらかと言えば学びになった」と回答した者の訪問件数は12.0件であった ($F[1/77] = 6.28, p < .05$)。従って学生に、より学びになるようにするためにも訪問件数は16件程度必要であることが示された。地域看護学実習Iでは、実質6日間臨地に出向くが、半日は施設オリエンテーションが入るため、5.5日間で16件の訪問件数が良いことになる。従って換算すれば、学生の学びの認識を高めるためには、日に3件程度の訪問を確保することが必要であることが示された。

(4) 地域看護学実習I終了後の変化

最後に学生が地域看護学実習Iを経験することで、訪問看護師への認識がどのように変化したかを検討するため、以下の分析を行った。実習前(調査1)の「訪問看護師はどのような仕事をするのか具体的なイメージがありますか」についての回答と、実習後の「訪問看護師の役割について理解を深めることができましたか」「今回の実習で訪問看護に対する興味を高めることができましたか」についての回答で、繰返しのある平均値の差の検定を実施した。その結果、有意な結果が得られた(表7参照)。平均して学生は実習前には、訪問看護師の仕事に関して具体的なイメージを強く有していない($M = 2.9$)が、地域看護学実習Iを経験することによって、訪問看護師の役割について理解を深めることができた($M = 3.5$)と回答しており、訪問看護に対する興味を高めることができた($M = 3.4$)と回答している。従って、訪問看護師の役割を理解する上で、地域看護学実習Iが有効であることが示された。

5. 考 察

はじめにで前述したように、在宅看護は看護専門分野において最も新しい領域であり、在宅看護に関する実習においても実習形態・期間は教育機関によって多様であり、それぞれの教育機関がより良い実習を構築するために創意工夫をしている現状にある。川越ら¹⁾

は、学生の同行訪問の事例数は学習体験としては2～3事例/日が限界であることを指摘している。多すぎる訪問件数は、学生の負担となり、学習効果が望めない可能性がある²⁾。妥当な訪問件数を知ることは学生の学びを高めるためには重要であろう。但し、訪問看護に関する実習において、どの程度の訪問件数が妥当であるかは、学生のレディネスや実習目的・目標によって異なり、一概に論じることはできない。そのため、本研究はあくまでも、本大学の現在の教育カリキュラム、そして実習形態と目的・目標に限定して言うことであるが、学生の学びを高めるために有効な訪問件数は3件/日であることを明らかにすることができたのは大きな成果であった。本校の地域看護学実習Iにおいては、今後この知見を活用し、実習施設側に依頼して訪問件数を調整していくことが、学生の学びを高めることにつながると思われる。

今回、地域看護学実習Iにおいては、学生の満足度は平均82.3点と非常に高く、学びに関する自己評価も4点満点中平均3.8点と高いものであった。これには、実習施設側の実習指導者をはじめ職員の方々の指導によるものが大きいと言えよう。学生は訪問に同行する中で訪問看護師の活動を実際の目で見て学び、看護師から指導を受けることで学びを深めていくものと思われる。従って、如何に指導体制の良い施設で実習できるか、訪問同行件数を3件/日程度、確保できるようにするかが、学生の学びに大きく影響するものと思われる。長江ら³⁾も訪問看護実習において、実習施設側と教育機関側の両者の重要性を指摘しているが、実習目的・目標を達成するのにふさわしい実習施設であるかを検討することは必要と思われる。

ところで、看護系大学教育においては、単なる知識の伝授だけでなく、学生自らが考え学ぶことができるように育成することが重要視されている。一方、近年、学生の学力や意欲、背景、レディネスは多様化している。総体的に学習意欲やレディネスの低い学生の学習意欲を如何に高め、興味を持たせるかが、自ら学び考えることのできる学生を育てる上で重要となる。学生の知的好奇心を高め学ぶ意欲を向上させるためには、

教員も講義内容を工夫し、様々な学習資源を活用していくことが必要となる。本校の在宅看護論の講義においては、学生の学習への関心を高めるため、在宅での介護を体験した家族の実体験講義等の学習資源を取り入れている。しかし、訪問看護師の仕事についての具体的なイメージ形成においては、講義だけでは十分と言えないことが本研究結果から示された。そうした、講義での限界を実習が補っていると言えよう。結果から、学生は実習により、訪問看護師の役割を理解し、訪問看護についての興味を高めることができたことが明らかとなった。今後も学生の意欲を高め、在宅看護や訪問看護について興味が高められるよう、より良い実習を構築するために、実習施設の職員と協働していく能力が教員には求められていると言えよう。

そして本調査結果から、現行の訪問看護実習において学生は、実習目標に関連することを学び、学習効果のあることが明らかとなった。実習目標を考慮し、学習効果を実証的に検証しながら、講義・演習・実習の方法を適宜修正してゆくことも教員の役割としては重要であると思われる。実習施設に関しても現在実習依頼している施設に問題点が見られた場合には、実習施設との調整や新たな実習施設の開拓も必要と思われる。

なお、学生の実習満足度に影響する要因は「訪問看護に対する興味を高めること」と「訪問看護師の役割について理解を深めることができた」「在宅看護において家族を支える重要性を理解することができた」であった。利用者だけでなく家族を支える重要性を理解し、訪問看護に対する理解を深め、興味が高められた学生ほど、実習に対する満足度は高くなっている。訪問看護について学生の理解や興味を高めることは学習効果をあげる上で重要であるが、そのことは学生の満足度を高めることにもなることが結果から示された。先に指摘したように学生が自ら学ぶ意欲を高め主体的に取り組むためには、学習心理学⁴⁾で指摘されている正の強化が重要である。即ち、実習を経験して満足感といった正の強化を得ることで学生は更なる学習へと主体的に取り組んでいける。そうした、意味においても、実習において如何に学生の満足度を高めるかは重要な点となる。

一方で、学生が訪問看護に対する興味を高めることには施設側の要因だけでなく、担当教員の影響も少なくないことが本研究から明らかとなった。あくまでも本研究の結果からだけでは、断定的なことは言及できないが、学生が訪問したケースについて、教員は学生に振り返りをさせ、訪問看護の役割や訪問看護の必要

性等について指導することにより、学生は気づき、訪問看護への関心を高めているのではないだろうか。しかし、この点に関しては更なる検証が必要であろう。また教員は、具体的どのように指導すれば学生の実習満足度や学びが高まるのかといった教員の指導のあり方に関しては、本研究では検討することができなかった。この点は我々の重要な関心ごとでもあり、今後の研究課題としたい。

最後に本研究の問題点と今後の課題についてもう2点述べておきたい。まずは、本研究の最も大きな問題点として、学びの程度を把握するのに、学生の自己評価のみを用いていることがあげられよう。学びの程度を検討するためには、実習指導者や教員の客観的な評価点も検討する必要があると思われる。しかし、客観的な他者評価点を用いるとなると、学生個人を特定する必要があるため、無記名で個人を特定しない今回の調査との併用は現実的に実施が困難であった。より詳細な学生の学習効果に関する研究を実施するためには、今後は学生の同意を得た上で、指導者・教員の評価点を用いた研究も必要であると考えている。次に、学生の学びや満足度に影響するものとして、施設側の対応、設備、通学時間等様々な要因が考えられるが、本調査においては残念ながらそれらの要因に関する質問項目は設定していない。今後は、学習効果や満足度に関するアンケート調査ではこうした質問項目を加えて調査を実施することが必要であり、今後の課題としたい。

謝 辞

多忙な業務の中、当校の学生実習指導に多大なご尽力とご指導を頂いている、訪問看護提供施設職員の皆様に心より御礼を申し上げます。

そして今回、卒外研究費を助成頂き、貴重な研究機会をご提供下さった、藍野大学高橋学長、矢野学部長に心より御礼申し上げます。また、アンケートにご協力下さった学生諸氏にも深く感謝します。

引用文献

- 1) 川越博美, 長江弘子, 錦戸典子, 成木弘子, 成瀬和子, 全国訪問看護事業協会監修. 訪問看護ステーション臨地実習マニュアル. 東京: 医学書院; 1999. p. 30.
- 2) 乗越千枝, 小林裕美. 訪問看護ステーションにおける臨地実習の同行訪問の状況 —— 学生実習記録から ——. 日本赤十字九州国際看護大学紀要 2005; 3: 35-44.
- 3) 長江弘子, 酒井昌子, 川越博美. 主体的に取り組む

- 2週間の訪問看護実習. 看護展望 2002; 27(1): 90-7.
- 4) 中島義明ほか編集. 心理学辞典. 東京: 有斐閣; 1999. p. 503. (正の強化とは「(1) ある反応に対して, 食物や水など, それ自体接近反応を引き起こす強化刺激を呈示すること」「(2) スキナーの実験的行動分析の立場に立って, オペラント行動に対して正の強化刺激を随伴的に出現させることにより, 当該オペラント行動の生起頻度を増大させる操作及びその過程」と記されている)